

# 基底と次元

定義 4.5  $v_1, \dots, v_k \in V$  が次の条件を満たすとき.

ベクトルの組  $v_1, \dots, v_k$  を **1次独立** であるという.

条件:  $r_1, \dots, r_k \in \mathbb{R}$  に対し.

$$r_1 v_1 + r_2 v_2 + \dots + r_k v_k = 0 \Rightarrow r_1 = r_2 = \dots = r_k = 0$$

また、1次独立でないときは **1次従属** であるという.

例 Ⅱ (1)  $r \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} + s \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix} = 0$  とすると  $\begin{cases} r+s=0 \\ r+2s=0 \end{cases} \therefore r=s=0$

$\therefore$  これは 1次独立

(2)  $r \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} + s \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} = 0$  とする.  $\therefore$  例えは  $r=2, s=-1, t=-1$  とすると.

$$2 \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} - \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix} - \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} = 0$$

となり上の等式を満たす  $\therefore$  1次従属である

問 Ⅲ (3) (4) (5)

$\mathbb{R}^n$  のベクトルが 1次独立になる条件.

$$\mathbb{R}^n \ni v_1 = \begin{bmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ \vdots \\ a_{n1} \end{bmatrix}, v_2 = \begin{bmatrix} a_{12} \\ a_{22} \\ \vdots \\ a_{n2} \end{bmatrix}, \dots, v_k = \begin{bmatrix} a_{1k} \\ a_{2k} \\ \vdots \\ a_{nk} \end{bmatrix}$$

が 1次独立になる条件を考える.

$$r_1 v_1 + r_2 v_2 + \dots + r_k v_k = \begin{bmatrix} r_1 a_{11} + r_2 a_{12} + \dots + r_k a_{1k} \\ r_1 a_{21} + r_2 a_{22} + \dots + r_k a_{2k} \\ \vdots \\ r_1 a_{n1} + r_2 a_{n2} + \dots + r_k a_{nk} \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1k} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2k} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \dots & a_{nk} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} r_1 \\ r_2 \\ \vdots \\ r_k \end{bmatrix} = Ax$$

$A \rightarrow$   $x$  とおく.

とできることから、条件式  $r_1v_1 + \dots + r_kv_k = 0$  は  $Ax = 0$  とかける。

つまりこの連立方程式  $Ax = 0$  が

自明な解  $\mathbf{0}$  のみをもつ  $\Rightarrow$  1次独立

それ以外の解をもつ  $\Rightarrow$  1次従属である。

これと命題 2.9 より次を得る。

定理 4.4.  $v_1, \dots, v_k \in \mathbb{R}^n$  が 1次独立である必要十分条件は、

$A = [v_1 \ \dots \ v_k]$  とするとき、 $\text{rank } A = k$  である。

系 4.5.  $v_1, \dots, v_k \in \mathbb{R}^n$  が 1次従属である必要十分条件は、

$\text{rank } A < k$  である。

系 4.6. (1)  $k > n$  ならば、 $v_1, \dots, v_k$  はつねに 1次従属。

(2) 次は互いに同値。

(a)  $v_1, \dots, v_n$  は 1次独立。 (b)  $\text{rank } A = n$ 。

(c)  $|A| \neq 0$  (d)  $A$  は正則行列。

例 問(1)  $A = \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 2 \end{bmatrix}$  とすると  $\text{rank } A = \text{rank} \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} = 2$  とおきので 1次独立

(2) 系 4.6 (1) より 1次従属。

問 問(3) (4) (5)。

命題 4.7  $V$  において次が成り立つ.

(1)  $v_1, \dots, v_n$  が 1次独立なら.  $\forall k \leq n$  に対し.

$v_1, \dots, v_k$  が 1次独立.

(2)  $v_1, \dots, v_n$  が 1次従属なら.  $\forall u \in V$  に対し.

$v_1, \dots, v_n, u$  が 1次従属.

(3)  $v_1, \dots, v_n$  が 1次独立,  $v_1, \dots, v_n, u$  が 1次従属なら.

$u$  は  $v_1, \dots, v_n$  の 1次結合でかける. (さらにその表し方は一意)

① (1)  $r_1 v_1 + \dots + r_k v_k = 0$  とすると.

$r_1 v_1 + \dots + r_k v_k + 0 \cdot v_{k+1} + \dots + 0 v_n = 0$  より  $r_1 = \dots = r_k = 0$  となる.

(2)  $r_1, \dots, r_n$  を  $r_1 v_1 + \dots + r_n v_n = 0$  の自明でない解とすると.

$r_1 v_1 + \dots + r_n v_n + 0 \cdot u = 0$  となる  $\therefore$  1次従属.

(3)  $r_1, \dots, r_n, s$  を  $r_1 v_1 + \dots + r_n v_n + s u = 0$  の自明でない解とすると.

$s = 0$  なら  $r_1 = \dots = r_n = 0$  ではないといけないから.  $s \neq 0$  である.

$\therefore u = -\frac{r_1}{s} v_1 - \frac{r_2}{s} v_2 - \dots - \frac{r_n}{s} v_n$  となる. (一意性は省略).